

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第878号 平成27年2月10日

管理職になりたくない？

女性の社会進出が進んでいる中で、女性新入社員の7割が「管理職になりたくない」と考えているというニュース（平成26年12月23日付読売新聞他から）は、安倍総理が掲げる「女性の輝く社会」の実現が容易ではない事を浮き彫りにしています。

日本生産性本部では、新入社員の入社半年後の意識変化の調査を目的に、当本部が毎年秋に実施している新社員教育プログラム等への参加者を対象に意識調査を行っており、上述の読売新聞等の記事は、その結果を紹介したものです。

なお、日本生産性本部では秋の調査とは別に、毎年多くの企業や学校等就職・採用担当者の協力を得ながらその年の新卒入職者の特徴や就職・採用環境の動向等について調査研究を実施し、その年ごとの新入社員の特徴やデータの経年変化を4月に発表しています。

それによると、平成26年度新入社員のタイプは「自動ブレーキ型」なのだそうです。

最近の自動車は「自動ブレーキ」システムの搭載が当たり前になって来ていますが、平成26年度の新社員も、知識は豊富で敏感だが、何事も安全運転の傾向があり、例えば就職活動についても、そこそこの内定が得られると壁にぶつかる前に活動を終了してしまうとしています。

「手堅いが迫力不足」というのが、平成26年度の新社員に与えられた評価ですが、私は、「手堅い」というのは決して悪い事ではないと思っています。

また、「迫力不足」という点についても、採用担当者の目にはそう見えるのかも知れませんが、逆に、新社員が訳も分からず自信満々という方が不自然であり、私はそれ程心配していません。何故なら、「迫力不足」というのは、採用後のジョブトレーニング等を通して変わり得るものだと考えているからです。

さて、本題に戻しましょう。

平成26年度に採用された新人に「あなたは管理職になりたいか」を聞いたところ、全体の48%（男性新社員は34.5%、女性新社員は72.8%）が「なりたくない」と回答しています。

私の経験からも、管理職になりたくない女性が多いとは想像していましたが、それでも、7割を超える女性新社員が「管理職になりたくない」と考えているというのは、ちょっと驚きです。

それでは、新入社員達は何故「管理職になりたくない」と考えているのでしょうか。

その理由は、下記の通りです。

「自分の自由な時間を持ちたい」とか「組織に縛られたくない」という気持ちは分かりますが、しかし、会社に就職するというのとは一つの組織に所属するという事ですから、その意味からすると、一定程度の不自由は甘受しなければなりません。

新入社員の「管理職になりたくない理由」

	自分の自由な時間を持ちたい	専門性の高い仕事をしたい	重い責任のある仕事を避けたい	組織に縛られたくない	その他
全体	46.8%	19.6%	14.0%	14.0%	5.6%
男性	56.2%	14.6%	12.5%	12.5%	4.2%
女性	38.9%	23.7%	15.3%	15.3%	6.8%

日本生産性本部資料により作成

自分の時間を大事にするという考え方は、残業に関する考え方にも如実に表れています。

残業に関して「残業は多いが、仕事を通じて自分のキャリア、専門能力が高められる職場（A）」と「残業が少なく、平日でも自分の時間を持って、趣味などに時間が使える職場（B）」のどちらが良いか聞いたところ、70.1%の新入社員が（B）の方が良いと答えています。しかも、女性の新入社員にあっては81%という高率です。

残業は少ない方が良いですし、何より、恒常的に長時間残業しなければならない職場は適切だとは思っていません。ただ、如何に自分の趣味を大事にしたいと思っても、会社に勤めている以上、現実には、仕事との兼ね合いで趣味の時間を減らさなければならないという場合は少なくありません。

それは、どのような仕事であれ、その仕事を任された以上責任が生ずるからであり、与えられた責任を全うするというのは、職業人であれば至極当然の事だからです。

「自分の自由な時間を大事にして趣味を楽しみたい、だから、責任のある仕事はしたくないし、決まった時間に帰りたい」と考えるのも、「管理職になれば、責任は重くなり、時間的な拘束も増え、趣味の時間が少なくなるから管理職になりたくない」と考えるのも、人それぞれの考えであり否定はしません。しかし、仕事をするために会社に入ったのである以上、仕事を通じて会社に貢献するという考え方は持って欲しいものだと思います。

昨今の「管理職になりたくない病」に罹っている若者が少なくない現実に直面して、私は、「事の任となるなかれ」という言葉を思い出しています。

これは「荘子」の「応帝王篇」の中に出て来る一節で、名誉を受ける中心にはなるなど、以下のように記されています。

「名の戸と為ること無かれ。
謀の府と為る無かれ。
事の任と為る無かれ。
知の主と為る無かれ。」

「名の戸」というのは、祖先の祭のときに、祖先の代理を務める少年の事で、「名の戸と為る」というのは、名声を自然に招く実質がないのに名声だけを得るという事ですから、力もないのに名声だけを得ようとするなという意味になります。

「謀の府」とは、策謀知略を出す倉の事であり、「謀の府と為る無かれ」というのは、そういう謀を出すような存在となるな、ということ事です。

「事の任」とは、事業の責任者という意味ですから、「事の任に為る無かれ」というのは、さしずめ現代風にいうなら起業家になるな、管理職になるな、という事になりませんか。

最後の「知の主と為る無かれ」というのは、知恵の主人公にはなるなという事です。

「荘子」という人は、無為自然を基本とし、人為を嫌った人だとされています。

その思想は、「其の天よる受くる所を尽くして、得るを見る無かれ。亦、虚なる而矣（「応帝王篇」から）」という言葉からも伺われます。

つまり、天から授けられたままを享受して、それ以上のものを得ようとするな。ひたすら虚心であれ、という事です。

「荘子」がいうように、俗世間を離れて、無為の世界に遊んで一生を終えられるなら、少なくとも自分は傷付かずに済むかもしれません。

ただ、自然体でといいながら現状に甘んじ、一步も前に踏み出そうとしない、そんな思考の人ばかりでは、この世の中は一体どんな事になるのでしょうか。少なくとも、そんな社会に明るい未来が描けるとは思えません。

現実には、少しでも背伸びをしよう、傷付いても、馬鹿にされても現状を打破しようと考え、行動する、そうした沢山の人々の汗と涙、そして喜び、そういうものが沢山あったからこそ、この社会は大きく発展して来たのではないのでしょうか。

（塾頭：吉田 洋一）